

# 現世無間御書

建治四年二月一三日 五七歳

或はくびをきり、或はなが<sup>流</sup>さればとと<sup>説</sup>かれて、此の法門を涅槃經・守護經等の、法華經の流通の御經にときつがせ給ひて候は、此の国をば梵王・帝釈に<sup>仰</sup>仏をほせつけて他国よりせめさせ給ふべしとと<sup>説</sup>かれて候。されば此の国は法華經の大怨敵なれば現世に無間地獄の大苦すこし心みさせ給ふか。教主釈尊の日蓮が<sup>方</sup>かたう<sup>人</sup>どをして<sup>知</sup>つみしらせ給ふにや。よもさるならば天照大神・正八幡等は此の国のか<sup>方</sup>かたう<sup>人</sup>どにはなり給はじ。日蓮房のか<sup>敵</sup>たきなり。すゝみて<sup>懲</sup>ならわかし候はんとぞはやり候らむ。いのらばいよいよ<sup>祈</sup>あしかりなん、あしかりなん。恐々謹言。

二月十三日

日 蓮 花 押

御 返 事